

旧陸軍被服支廠と原爆被爆

— 利活用を考えるにあたって

忘れてはいけないこと —

2022年3月13日

被服支廠の保全を願う懇談会 副代表
多賀俊介

簡単な自己紹介

- ◎ 1950年生、広島で中・高等学校の教員を務める。入市被爆二世
- ◎ 2011年よりヒロシマピースボランティア
- ◎ ヒロシマピースボランティア先輩で旧被服支廠で被爆された中西巖さんから声をかけて頂き、保全活動のお手伝いを始める。
- ◎ 2014年「旧被服支廠の保全を願う懇談会」発足、代表中西巖さん
- ◎ 2020年「旧被服支廠の保全を願う懇談会」が証言資料集「赤レンガ倉庫は語り継ぐー旧広島陸軍被服支廠被爆証言集ー」刊行
- ◎ 2022年県の利活用ワークショップメンバーに

被爆当時の写真を示して証言される中西 巖さんと、会が編集した証言資料集





県立広島工業高校同窓会提供

2018(平成30)年3月撮影

旧陸軍被服支廠倉庫の被爆建物としての特徴は

- ▶ ◎世界最大級の被爆建物
- ▶ ◎原爆ドームより2年前にできた陸軍の建物で、軍都広島時代の様子も伝える建物。（中西さんや切明さんの軍都時代の証言をその場で聞ける）
- ▶ ◎原爆ドームと違い、爆心地から離れていたこともあり、被爆時のようすの証言記録（朝鮮人を含む）が多く残り、今も、その場所で被爆した方の証言が聞ける場所。（峠三吉の原爆詩集「倉庫の記録」等原爆文学でも取り上げられている。ここで働いていた四国五郎さんの絵もある。）
- ▶ ◎被爆時のようすを迫体験できる場所で、原爆や戦争の恐ろしさ、平和の大切さを考えられる場所。

被爆建物

A-bombed Buildings

被爆時の名称 **広島陸軍被服支廠**
(爆心地から 2,670m)

この建物は、1945年(昭和20年)8月6日の原爆にも耐え、その姿を今日に残しています。被爆直後は臨時救護所となり、避難してきた多くの被爆者が次々と力尽きていきました。爆心地の方向に面していた西側の鉄扉のいくつかは、被爆時の爆風で変形した痕跡をとどめています。

広島市

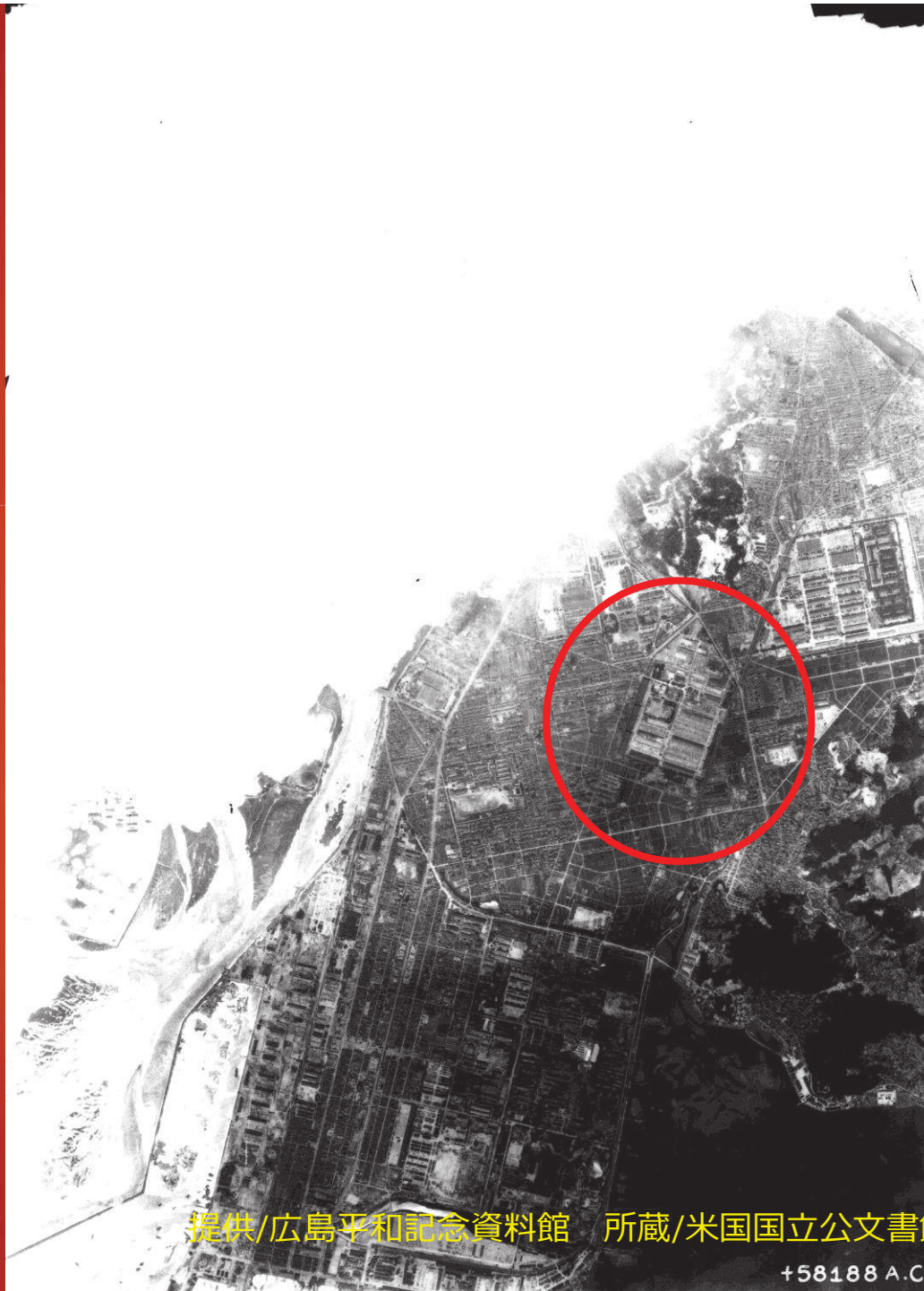
Name at time of
atomic bombing:

Hiroshima Army Clothing Depot

(Approx. 2,670m from hypocenter)

These buildings withstood the atomic bombing on August 6, 1945. Shortly after the bombing, they served as a temporary relief station that saw the deaths of many victims, one after the other. Several of the iron shutters on the west side facing the hypocenter were deformed by the blast and remain in their original condition.

The City of Hiroshima



提供/広島平和記念資料館 所蔵/米国国立公文書館

+58188 A.C.



地元の子ども達に爆風で曲がった鉄扉と爆心地の方向を示しながら説明。海外の方にも現地で説明したこともあります。



平和記念資料館本館に展示された被服支廠倉庫の曲がった鉄扉と、爆風の影響でずれたレンガ塀と突きあがった笠石（リニューアル前の展示）



現在の展示（左側に曲がった鉄扉）



中西巖さんの被爆場所



広島陸軍被服支廠見取り図（橋本秀夫氏作図〈註20 P119〉を一部変更省略し作成
〔編集注：昭和20年7月末に木造の3番庫・7番庫も取り壊していた〕

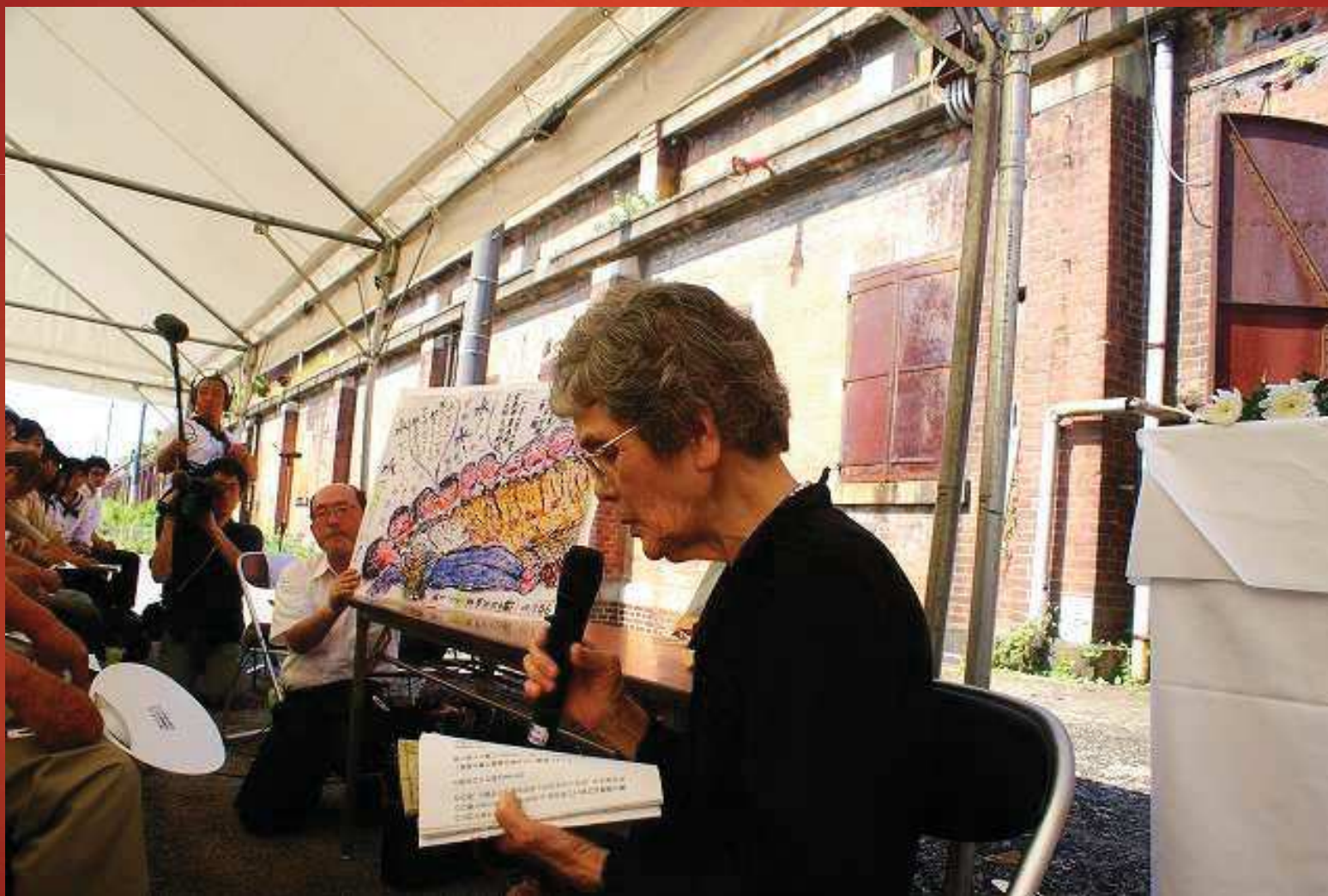
中西巖さんの証言から

- ▶ 「・・・突然、目の前に閃光が走り、白紫色の光に包まれた。あっと思う間もなく体が巻き上げられ、数メートル先の地面に叩きつけられた。轟音の覚えは無い。うつ伏せ状態で周りを見回すと、ねずみ色の煙と粉塵の中で何も見えない。「やられた」、「熱い」の声だけが聞こえた。・・・かすかに見えた簡易防空壕に転がり込み、体中を触ってみたが、全く無傷であった。・・・外にでてみると、同級生らが多数負傷しており、建物は半壊し、外は混乱状態だった。偶然にも私は頑丈な倉庫の鉄の扉（前）にいたので助かった・・・」
- ▶ 「この倉庫が熱線・爆風から守ってくれた。この倉庫も被爆者だ。私の話を聞いた小学生が、「熱かったね」とつぶやきながら倉庫のレンガ塀をなでてくれたのがうれしかった。」

被爆した場所付近の1号棟（13番倉庫）前でその時のようすを証言される中西巖さん



被服支廠 1 3 番倉庫（現 1 号棟）前で 当時の様子を証言される佐藤泰子さん





作/佐藤泰子

所蔵/広島平和記念資料館

場所(旭町 陸軍被服支廠) 時(8月6日)

佐藤泰子さんの証言から（「赤レンガ倉庫は語り継ぐ」 p.23）

- ▶ 「・・・あれから五十年経った今も私の耳に焼き付いて離れない女学生の声が聞こえて来ます。「死んでもいいから飲ませてください！一口ゴックリ飲ませて下さい」動員学徒にかり出され全身焼けたただれた山中高女（現広島大）一年生の少女の息絶え絶えの中でのふりしぼる様な声です。（死んでもいいから、一口ゴックリ）この言葉、どんなに水が飲みたかったか！思い出すたびに私の胸は張り裂けるようです。手を合わせ、少女に詫びるのです。・・・」

倉庫内で当時の状況を大学生に証言する中西さん (2017年)



森武徳さん（中西巖さんの同級生）の証言 から（「赤レンガ倉庫は語り継ぐ」 p.50）

- ▶ 「・・・暗くなりかかったころ、遺体を収容してある1番倉庫を訪ねてみた。・・・倉庫の中は暗くなっていた（電気は停電している）が、入口にろうそくが5～6本立ててある。・・・ろうそくを回り込んでみてあっと驚いた。そこには遺体が山のように積み上げてある。ろうそくは遺体到手向けられたものだった。遺体の目は皆開いたままである。その目にろうそくの光が映えて目がチラチラ動いているようだ。家族の消息を知ることがなく、自分の様子を家族に知らせることもできず、淋しく無念の死を遂げた思いを訴えているようで、足がすくみ動かない。何もしてやれなかったのだなあ、という思いでじっとしていると、自然に涙が出て止まらなかった。・・・」

「・・・倉庫が救護所になった。六十体余りの屍体が夕刻東通用門外の空き地で火葬された。」（「赤レンガ倉庫は語り継ぐ」 p. 9）



作/大西比呂志
所蔵/平和記念資料館

陸軍被服廠の火葬

陸軍被服廠に
逃げ込んだ被爆者は
その日の内に
何十体となく
遺体となり
運動場に
掘った穴が
急場の
火葬場となった。
陸軍の兵士が
松根油をまき
日中に連日
紅蓮の焰が
あがり
黒焰が
めらめらと
燃え盛った。



作/大西比呂志
所蔵/広島平和記念資料館

中西さんの証言を聞いたあと、「中西さんにとって平和とは何ですか」と質問する小学生



被爆建物であることを踏まえた利活用案①

- ▶ ◎ 追悼空間→現状にあまり手を加えず、そこで追悼行事が行えるような空間
- ▶ ◎ 「核兵器廃絶学習センター」 (中西さん)
- ▶ ◎ 平和記念資料館分室 (第二平和記念資料館) 例: シュモーハウス
- ▶ ◎ 被服支廠を中心とした資料館→関連して広島軍都遺跡、被爆建物、原爆文学・絵画等の資料 (加害の面も含む) 展示も
- ▶ ◎ 原爆関係、平和教育関係資料収蔵庫
- ▶ ◎ 被爆証言や映像資料を体験できるホール、会議室

被爆建物であることを踏まえた利活用案②

- ▶ ◎ 多くの方の命が失われた場所
- ▶ → 新しい命を育む場所へ
- ▶ 例：母親と子ども達の施設
- ▶ ◎ 多くの被爆者が救援救護された場所
- ▶ → 国内外の苦しんでいる人々への救援救護のための施設へ
- ▶ 例：被災者や難民支援施設、備蓄倉庫
- ▶